

「ぼくの見た町 ぼくの想う町」

東京都聖徳学園小学校 二年 土屋 有生

五月三日（ゴールデンウィークの始まり）

一ばん下のひかるちゃんも歩くことができるようになり、ぼくたち五人家ぞくは車で宮城県仙台へむかいます。家を出る前、お父さんに「こんどの旅行は、とってもひどい、かなしいけしきを見るかもしれない。でも、有生にとって何おく円のお金を出してもできない勉強だから、家ぞくみんなでがんばろう。」といわれました。このゴールデンウィークで東日本大しん災の被災地へ行ってボランティアをやりうとていあんしたのはお母さんでした。（ボランティアっていったい何をするんだろう？ぼくは小学二年生、妹の真心は幼稚園、ひかるちゃんは赤ちゃんだし…。そんな子ども三兄妹でもできるのかな？）

ぼくは心ばいなこともあったけれど、はやくこまっている人をたすけてあげたいと思って、お母さんのていあんにさんせいしました。

ぼくたち家ぞく五人は、車で東北自動車道を仙台にむけて出ばつしました。ぼくは、これまで、東日本大しん災で町がめちゃくちゃになった風けいは、テレビでもあんまり見ていませんでした。でも、今回は、たのしい家ぞくの旅行ではありません。車の中では「ひさい地で何ができるんだろう。」と考えていました。ぼくはいつのまにかねむっていました。

目がさめると、韓国語が聞こえてきたので、ぼくは韓国にいるのかとまちがえてしまいました。ぼくは父母の友だちのせん教師さんの家にねていて、そこに集まっていたのは韓国人のクリスチャンの人たちで、ボランティアのために来てくれたのです。はじめてボランティアをするのに、外国の人といっしょで、とてもうれしくなりました。

朝六時半、ぼくたちは車六台で、目的地の名取市災害ボランティアセンターに行き、そこでぼくたちがやるところを教えてもらって、長ぐつや手ぶくろをかりました。災害ボランティアセンターには、たくさんの大人が、工事や山のぼりみたいなふくで集まっています。中に入ると、目の前に人をさがしているけいじばんがあり、紙がいっぱいはってあります。けいじばんを見て、とてもたくさんの人が行方ふめいなんだなあとショックをうけました。

ぼくたちが向かったのは、海ぞいの二かいだての家で、行くと中の道で、さいしよは家も畑もきれいでした。ところが、海に近づくにつれどんどんゴミが多くなってきました。道路のがれきは、道ばたに山のように重なっていました。ぼくたちがかたづけをする家は、海からだいたい四キロはなれたばしよにあります。ここからは海は見えません。

それなのに……。

(ほんとうに、かたづくのかなあ。)

さいしよ、お父さんは「見ているだけでいいよ。」と言ってくれました。あとで聞いたら、ボランティアセンターでは、「子どもはあぶないので作業はできません。」と言われたそうです。でも、お母さんがおうちの人におねがいして、あぶくないようにいっしよにできることになりました。

五才の妹の真心は、知らない大人の人に軍手をはめてもらっていました。がれきの山はぼくのせより高く、つもっているどろをスコップで取らないといけません。はじめて持つスコップは大きくて、重かったです。ふくろにどろをつめ、一りん車でごみをはこびます。

かたづけは、おもったより、とてもきつかったです。ごみも、どろも強れつにくさかつ

たので、なれるのに時間がかかりました。

休けいするとき、お父さんとたんけんに行きました。

地めんはからっからで、まるで砂ばくみたいでした。波とどろをかぶって食べられなくなったお米が山になっていました。

冷ぞうこがころがっていました。

とびらをあけると、食料品がそのまま入っていて、とてもくさいにおいがしました。田んぼに水がたまっていけになっていました。水も花も海水をかぶってかれそうになっていました。お父さんが「まるで荒野だ。」とつぶやきました。

一人一人がいっしょうけんめいやっているから、少しずつきれいになってきました。

ここの家にすんでいる人は二日間立ち入り禁止と言われて、三日目にやっと中に入れたそうです。家を見してみると家中がどろだらけでめちやくちやだったので、かなしすぎてなみだもでないくらいだったと言っていました。

波の高さは高いところで十メートルで、この家では、二メートルくらいまで波がきたようです。

「かなしすぎてなみだもでない。」

こんなことは、ぼくには経けんがないし、想ぞうもできません。でも少しでもこまっている人を手つだって、「ぼくだってがんばれたぞ。」と思いました。その日はぐっすりねむれました。

五月五日こどもの日にぼくが見た町

朝五時に仙台を出ぱつしました。

今日の目的地は、石巻市です。石巻市は東北で一ばんひ害がすごかったところだと聞いていたので、ちよとこわいきもちでした。

石巻市に着くと、たくさんのがれきと、車がへんなところにつっこんでいたりしていました。そのほかにも、ブランコの柱がまがっていたり、自動販売機がこわれてころがっていたりしていました。黒いランドセルのもちぬしは、ランドセルをおいてにげたのか、そのまま津波に流されてしまったのか、ぼくはとても心ばいになりました。

それから、石巻の海ぞいの方に行きました。海ぞいの空気は、とてもくさかったです。そのにおいは、海の水とがれきとへドロのせいだと思います。石巻は名取よりもめっちゃくちゃにこわされていました。でも、ぼくは、このくさい空気はわすれることができせん。津波に流された人は、もつとくさくてつらかっただろうなあ。

石巻の町を見たとき、お父さんもお母さんもぼくも無口になっていました。心の中は、津波で流された、たくさんの大人や子どものものでいっぱいだったからです。

ぼくが大人になったら、ぼくの子どもを、生まれかわったひ災地につれていきたいと思っています。そして、この時のようすを、教えてあげたいと思います。

教わったことば「前に進む一歩」

六月、つゆの晴れ間の土よう日。今度は、担任の先生と、クラスの友だちの家族とボランティアに行きました。

先生が家に車でむかえに来てくれて、ぼくとお父さんがのりました。ほかの友だちは、みんなはじめてのボランティアで、ちよつと心ばいしていました。

場所は、福島県の新地町しんちです。

ほんとうは（放しや能だいいじょうぶかな。）と少し不安だったけれど、先生には言えませんでした。

ぼくは、いつの間にか車の中でねていました。朝になって高速道路をおりると、コンビニによつて朝ごはんを食べました。ここでみんなとまちあわせです。

コンビニの前には、ずっと遠くまで田んぼが広がっていました。道路の片がわでは、田うえが終わって、赤ちゃんのうぶ毛みたいです。ところが、道路の反たいがわは、草が茶色くかれています。とてもふしぎな風景です。

このコンビニで四つの家族が集合しました。

新地町のボランティアセンターにつくと、みんなでセンターの人にあいさつしました。そこでバッジをもらい、ガムテープに名前を書いてあるのを、ようふくのそでにつけます。そして、マスクとのみものをもらい、リーダーときろくがかりをきめました。今回は、はじめての時とちがって、大人が七人、子どもが四人なので、ぼくたちだけのグループでかたづけをします。

じゅんぴができたので、ぼくたちは、車でお手つだいをする家に行きました。

そこにつくと、一人の女の人がまっていました。その家は二かいだてで、津波が家を通りすぎていったそうです。家の中はどろどろで、一回で終わるかなあと心ばいになりました。

ごとうさんは、津波が来たとき、べつのところに行っていたすかったそうです。

ぼくたちは家の中に入って、なにをやったらいいか考えてチームにわかれしました。

ぼくとふじもりさんは、水で外にだしてあるつくえをあらいます。池田さんとうとうたく

んは、おふろのそうじをしました。

やっている途中で、リーダー（池田さんのお父さん）が「休けい。」と言いました。ぼくは、のみものをのみながらまわりを見ると「津波ってひどいなあ。」とかなしくなりました。

家の中を津波が通ったために、一かいのまどガラスはほとんどわれています。家の中のものはほとんどが流されてしまいました。大きくて、重たいものはのこりました。でも、どろどろと波をかぶってしまったっています。

みんなで、どろだらけのピアノを外へ出しました。家の中学生のお姉さんが、かなしそうにピアノをさわっていました。

先生が、とてもりっぱなよろいを出して、ぼくがきれいにするようになりました。本もののかぶとです。ぼくは、何百年も前のおさむらいと話している気分になりました。よろいかぶとは、津波がひいた今でもどろだらけで、じつとがまんしています。このよろいは、ぼくの学校であずかることになりました。

つぎに、ふじもりさんと池田さんとリビングをぞうきんでふきました。これは、いつも学校でやっていることです。

みんなでがんばって、どろだらけの家がきれいになりました。

さいごに、ごとうさんがみんなの前で、

「これで一歩、前へ進めます。ありがとうございます。」

と言いました。ぼくは、「もとの生活にもどれます。」じゃなくて、「一歩、前へ進めます」とってどういうことなんだろう？と思いました。でも、とっても明るくて、かつこいいことばでした。お父さんも、とっても気にいったそうです。

夏休みになって先生がごとうさんの家に、よろいかぶとを引きとりに行きました。今で

は先生の家であずかっているそうです。まだ学校のきよかがもらえなくて学校へもつてこられないようですが、また会うのが楽しみです。

そして、ごとうさんは、むすめさんといっしょに夏休み、宮城にボランティアへ行つたそうです。

みんな「けっぱれ」

七月、これから長い夏休みが始まります。ぼくは、津波で家や友だちが流されてしまった子どもたちが、どんな夏休みをおくるのか心配でした。

終業式の日、先生と渡部さんと小林さん、それぞれのお父さん、お母さんたちと宮城県気仙沼の津谷つや小学校へ行きました。

ひ災地では、復こうのシンボルとしてヒマワリの種をいっぱいまいています。ぼくたち二年生も、理科の授業でヒマワリをそだてています。それで、二年生みんなでヒマワリの絵をかいて、その絵に「がんばろう東北」とか「ゆめにむかって咲け」とかメッセージをつけて津谷小学校にもっていくのです。

ぼくも「とどけに行きたい。」と言ったら、お父さんもお母さんも「ぜひ行きなさい。」と言いました。

宮城県についたのは、お昼の十二時ごろでした。いよいよ津谷小学校に向かいました。小学校につくと、女性の先生がまっていました。それで、校長室にあんないしてもらって、自己しようかいをしたら、校長先生が名しをくれました。校長先生は大きな声で「よく来ました。」と言いました。テレビに出てくる時の様ようみたいな先生でした。

ぼくたちは、みんながかいたヒマワリのえをつくえにひろげて見せました。

ぼくのヒマワリは、ジャイアントヒマワリという名前で、ひ災地の人たちが元気になるようにねがいこめたのです。すると校長先生は「これはすごいぞ。よし、ぜんぶのクラスにしようかいしよう。」と言ってくれました。それで、校長先生に案内してもらって、かいだんを上っていると、『津波でんでんこ』とまどガラスに書いてありました。それは、「津波がきたら、ばらばらににげろ。あとで会えるから。」というみだそうです。

まずさいしょに、二年生の教室に行きました。ぼくたちはまず、自己しょうかいをしました。そのあとみんなで、ヒマワリの絵を見せました。そうしたら、みんなが「すごい。」  
「うまい。」と言ってくれました。

ぼくは、はじめきんちようしていたけれど、津谷小学校のみんながよろこんでくれたので、むねをはりたくなりました。

クラスのみんなの中には、お父さんやお母さんを亡くした子どもがいるはずなのに、「みんななんで、元気でいられるんだろう、ふしぎだなあ。でも心の中は、きずついているだろうなあ。」と思いました。

校長先生は、ぼくたちを一年生から六年生までのぜんぶのクラスをまわらせてくれました。さすがにへトへトでした。でも、家で一まい一まいつくってきた、「どんな町にしたいですか？」というアンケートを全校生とに書いてもらえることになりました。ぜんぜんたりなかったけれど、学校の先生がコピーしてくれました。

学校のたてもの前には、大きなヒマワリがいっぱいさいっていました。

そして、学校のはんたいがわをふりむくと、グラウンドがあつてその半分ちかくが仮設住宅になってしまっていました。

津谷小学校では半分のグラウンドで、うんどう会をやったり、放しや能のせいでプール

ができなかったりいろいろがまんしてきたそうです。校長先生はさい後に、「自分が生まれ育った町が消えるなんて、こんなに悲しいなんて思わなかった。」と言って、太い声でわらってばかりいる校長先生でしたが、この時は、悲しそうに目をつぶりました。

元にもどるまで三十年かかるかもしれないけれど、ひ災地の人だけじゃなくて、ぼくたちもいっしょに復こうを考えていなくちゃいけないんだと思いました。

津谷小学校を出て、南三陸町へ行きました。津波で鉄こっだけになってしまった防災センターを見つけました。そこは、役所の女性の人が命がけでアウンスした場所です。みんな、おいのりをしました。

ぼくとお父さんは、その後、先生たちと別れて石巻に行きました。五月のゴールデンウィークに石巻に行ってから、二か月たった今、どんな風にかわったかを見に行くためです。

見に行く途中で信号きを見たら電気が消えていました。おまわりさんがいます。戦争の後みたいです。広島に原爆がおちた後みたいにひどい風景でした。

もしぼくたちが、この場にすんでいたら、どうなったかなあ。かぞくがみんな死んでぼく一人になったら、さびしいけれど一人でがんばって生きることが、ぼくにはできるかなあ。

それからさい後に、ぼくたちは、石巻市中央公民館に行って、ひなんしている人と話をすることができました。

津波があって百三十日もたったのに、なんで、まだ公民館でくらしているのかなあ。小さい子や、おじいちゃん、おばあちゃんがたくさんいて、家がないのはかわいそうです。

そこには、阿部さんという八十六才のおばあさんがいました。津波がきた時泳いでにげてきたそうです。ぼくは、おばあさんの「泳いでにげてきた。」という言葉がわすれられま

せん。阿部さんは、まごが亡くなったけれど、かなしすぎてなみだも出なかったと言っていました。前にも聞いたことがあります。前は意味がわからなかったけれど、今はすしわかります。おそうしきにいきたくても黒いふくがないのでいけないそうです。今は、タミ一枚の上に住んでるけれど、ちょうど明日から仮設住宅に入るそうです。

「けっぱれ」と書いたが、くがありました。

「がんばろう」という意味だそうです。

ぼくたちが帰る時に、阿部さんが「ありがとう。」と言ってあくしゅをしてくれました。それからぼくたちが外に出ると、つえをついた阿部さんがまっついていて、ペットボトルのお茶を二本くれました。自分が苦しいのにぼくたちにくれるなんて、どうしてそんなにやさしくできるんだろう。

#### ぼくの復こうプラン

ぼくの夏休みの研究テーマは、大震災復こうプランです。気仙沼の津谷小学校から、全校生とがこたえてくれたアンケートがとどきました。石巻の仮設住宅からお返事をもらいました。ぼくは、それを全部読んで、いっしょうけんめい考え、一まいの復こうした町の絵をかきました。ぜんぶで十九このアイデアがはいっています。

たとえば、「流されない家」。津波で家が流されないように、うまく形を考えて家をつなげるといいと思います。

それから、「雪を利用した魚市場」。冬にふった自然の雪を、魚市場の冷ぞうや冷とうにつかえるといいと思います。

「ひなんじよになる巨大ショッピングセンター」をいっぱいにつくる。

「ひ災した方々のいれいひ」。町の人たちの心の中心にあつて、一年に一度みんなでここに集まれるといいと思います。

八月中ごろ、ぼくの復こうプランが完成した。一まいの絵に全ぶのアイデアをまとめたから、たて物がきゅうくつになってしまったけれど、みんなのねがいがつまっています。

この復こうプランは、「こども環境学会」がぼ集している「復こうプラン国さいコンペ」に応募しました。そして、気仙沼の津谷小学校にも、同じ絵を送りました。一つでもいいから、ぼくのアイデアがさいようされて、ひ災地で役に立つといいなあ、と思います。

それから何日かがたつて気仙沼から、ぶ厚いふうとうの手紙がとどきました。津谷小学校の長田先生（校長先生）からの手紙です。

「有生くん、有生くんの優しくて人の命をしつかりと考えぬいた計画に本当におどろきました。」

と、筆で書いたみたいな字でした。やっぱり長田先生のお先は、福島できれいにしたかぶとをかぶった、大名だったにちがいありません。長田先生は、ぼくのアイデアひとつひとつに感そうをつけてくれました。先生の声が聞こえるみたいで、ぼくは「ははっ」とへんじをしていました。

「ただね…、有生くんは知らないだろうけど、『がれき』とは『瓦礫』と書くんだ。これは、こわれた瓦かわらと石ころの意味です。『がれき』と呼ばれているものは、実は津波が来る前は、ご家族や人々が大切に使っていたものです。それが津波でこわされたからといって石ころあつかいされては、かわいそうです。『がれき』と言うのではなく、『被災財ひさいざい』と叫ぶてくると、たくさんの人々に優しさをつたえることができるでしょう。」

ぼくは、これを読んではっとして「そうかあ。」とつぶやきました。お父さんも「とっても大切なことだね。」とうなずきました。

「人々に優しさをつたえる」ということはぼくのむねにやきつききました。

ぼくは、こまっっている人をたすけてあげたいと思ってボランティア活動に参加したり、アイデアを考えたりしました。でも、たくさんの人に会って、たくさんのことを教わりました。「人をたすけてあげる」という感じはありません。いっしょに考えて、町をつくっていくことが楽しいです。

ぼくが大人になったとき、ぼくの見た町がどんなふうになっているか、とても楽しみます。